

### 第3回台湾李登輝学校研修団

今回の研修団は野外視察からスタート。初日に一行を台南のご自宅へ食事招いてくれた黄崑虎・李登輝之友会総会長は、翌日の烏山頭ダム視察でも自らダム造成の意義などについて説明①。夜はライトアップされた台南の保存建築物（日本時代の台南州庁）を視察した②。

後半の渴望学習センターにおける室内研修では、予定されていなかった映画「跳舞時代」の簡偉斯監督（写真左）が突然登場して大いに盛り上がり③、最後の講義では羅福全先生（写真左）に加えて黄昭堂先生も再登壇、貴重なお話を聞くことができた④。最終日は待ちに待った李登輝校長の特別講義。終了後、研修団を代表して石川団長より記念品を贈呈⑤。この後、腰の状態が思わしくないにもかかわらず、自ら38名の参加者全員に修了証書を手渡された。[24頁参照]



①



②



⑤



③



④

## 【巻頭言】 李前総統に制約を課してはならない



副会長 加瀬 英明

李登輝・台湾前総統は、第二次大戦後のアジアが生んだ、もつとも優れた哲人政治家です。一人でも多くの日本国民が、李先生の薫陶を受けることを願っています。

新聞報道によれば、李先生が日本を訪問されることを希望していられるとのことですが、本来であれば日本国民が李先生の訪日を願わなければなりません。

李先生は日本の伝統的な国民精神を高く評価され、日本国民が貴重な精神的な資産を失おうとしていることに、警鐘を鳴してられました。これほど日本を深く理解され、日本の現状を憂いていられる外国の政治家は、他にありません。先生の警咳に接すると、日本人であることに自信が湧いてきます。

李先生は昨秋、アメリカを行脚されて、ワシントンのナショナル・プレス・クラブをはじめとして、精力的に講演を行われました。アメリカ政府は李登輝前総統だけではなく、陳水扁総統の入国も認めています。それにひ

きかえ、わが国は李登輝先生が先般、病氣治療のために来日された時も、北京の顔色を窺って、先生の行動範囲や、活動に厳しい制約を課しました。

アメリカは台湾へ大量の先端兵器を供給し、アメリカ側は国防副長官、台湾側は国防部長が出席して米台防衛定期協議を行い、北京が台湾に軍事威嚇を加えると、空母を中核とする機動部隊を急派して、台湾を守る姿勢を示してきました。それにもかかわらず、中国はアメリカに、一貫して媚びています。

日本は米中関係を日中関係の二本とするべきです。弱さを示すことは、靖国問題や歴史認識問題のように、相手から不当な攻撃を誘発することによって、日中関係を不健全なものとしてきました。中国のためになりません。李先生の入国を認めるだけでなく、先生の日本における活動についても、制約を課してはなりません。言論の自由は、日本国内において外国人にも保証されています。